

(^_^)v 趣味に生きる (第29回) ~☀~☂~☁~🍷~☀~☂

オーボエと私

~しろうとオーボエ吹き of 贅沢, 「輪の和」, そして JPP~

堤 寛

(藤田保健衛生大学医学部 病理学教授)

(^_^)v 趣味に生きる (第29回) ~. ~. ~. ~. ~. ~.

オーボエと私

~しろうとオーボエ吹きの贅沢,「輪の和」,そしてJPP~

堤 寛

(藤田保健衛生大学医学部 病理学教授)

◆オーボエリードの話

リード(reed)を使う木管楽器には、ダブルリードの(2枚のリードで音を出す)オーボエ、ファゴット(バスーン)とシングルリードのクラリネットやサクソフォーンがある。リードはアシ(ヨシ)の意味で、十分に乾燥させたアシ(イネ科の植物)の茎をリードに加工する。リードに適したアシはすべて人為的に栽培されている。

伐採は冬期に行われ、枝や葉を切り落とした状態で年余にわたって乾燥させる。乾燥期間は7年が必要とされてきたが、最近では2年程度で、節を切り落としたパイプ状で出荷される。南フランスの地中海気候がアシの乾燥に最適とされる。日本の気候では、何年も保存しておく酸化してパサパサになってしまうようだ。

プロのダブルリードプレイヤーは自分で“マイリード”を削る。材質にも大いにこだわる。素人オーボエ吹きの私はリードづくりができないため、リードは“おっしょうさん”がたより。市販品(といっても、プロオーボエ吹きの作品)を買うと、1本3,000円前後する。しかも、オーボエリードはあまり長持ちしない。タンギングの多い曲を一生懸命に練習すると、あっという間に鳴らなくなってしまう。本番にリードをベストの状態に保つことはとてもとても難しい。本番直前の練習(業界用語では“ゲネプロ”)で本番用リードをダメにしてしまうことが少なくない。というわけで、本番用に複数本のリードが必要なのである。

◆私の自慢の師匠

私の師匠、東京都町田市在住の湊 貞男先生はもと東京フィルハーモニー楽団員で、“世界一”優しい先生だと思う。2時間の個人レッスンが10,000円で、いつも新品リードを4本いただける。本番前は、何本でもいいから持って行きなさいと言われたことがある。レッスンそのものは無料なのだ。もともとは、リード2枚つきのレッスン料が¥7,000だったのが、自主的にレッスン料を値上げしたら、現在のような贅沢に格上げされた。演奏曲に合わせた特別仕様のリードづくりも日常的である。つまり、演奏曲で最も重要な部分がうまく鳴るようなリードを特別につくってくれるわけ。

その上、どんなにへたくそでも、練習不足でも、決して叱られない。そして、演奏の裏の裏まで、何でも知っている超ベテランオーボイストなのだ。現在まで使用し続けているマイ楽器(リグータ、エボリューション、フルオートマチック)を選んでくれたのも湊先生だった。レッスンにはこの上ない贅沢な環境といえよう。22年間にわたる適切な指導にこころより感謝。

◆私の本務とオーボエことはじめ

私の本業は、愛知県豊明市にある藤田保健衛生大学医学部の病理学教授であり、病理診断と医学教育を主なしごととしている。病理医として病理診断のセカンドオピニオンを無料で引き受け、診断内容を直接患者さんに説明する「患

者さんに顔のみえる病理医」を実践し続けている。最近、著書を出版したのでぜひお読みあれ！（患者さんに顔のみえる病理医からのメッセージ。あなたの「がん」の治し方は病理診断が決める！三恵社，2012.12，税込み¥1,600）。

22年前，前職の東海大学医学部時代に，当時の医学生にそそのかされて40の手習いではじめ，学生オケのメンバーとして初の定期演奏会でチャレンジしたのがベートーベンの交響曲第7番だった。音程どころか，指使いさえ怪しいキャリア半年のファーストオーボエを優しく容認してくれた学生諸氏にここに改めて感謝したい。東海大学と藤田保健衛生大学の学生オケの定期演奏会には欠かさず出演（今年で22回目！）。おかげさまで，いろいろな経験をさせてもらい，演奏継続の原動力だったことに間違いはない。時間をみつけては練習するものの，正しい音程がなかなかおぼつかないのが現実。“美しい音楽”には遠いのだが，“音を楽しむ”ことは間違いなく実践している。

◆わかば会とコンサート活動

医療者と患者と一緒に楽しむ音楽。それを発見・発展させることができたのは，乳がん患者

会「わかば会」のおかげである。愛知県刈谷市在住の寺田佐代子さんを中心として，2003年3月に23人で発足した乳がん患者会「わかば会」は，長年のがん患者支援活動をふまえて，2009年9月11日には，“NPO法人びあサポートわかば会”として再出発した。私は，監事としてともに歩み，実に多くを“体験学習”させていただいた。

2004年3月に大学内で開催した患者会発足1周年記念コンサート。患者会発足の仲間で，患者会発足半年で亡くなってしまった若き乳がん患者さんに捧げるため，無謀にも1年がかりで練習した難曲，モーツァルトのオーボエ協奏曲（ピアノ伴奏版）に挑戦した。準備や司会などやりながらのいきなりの演奏で，オクターブキーが利かないトラブル。長いピアノ前奏からやり直してもらったのが懐かしい（写真1）。あれからもう9年。

NPO法人びあサポートわかば会の活動には可能な限り参加している。がん患者のこころの支援・セルフケアの奨めといったわかば会独特の中身の濃い活動を通じて，多くの悩めるがん患者に出会う。一方で，プロの病理医として，セカンドオピニオンで出会う多くの患者さんがいる。



写真1 わかば会発足1周年記念コンサート

（藤田保健衛生大学フジタホール 500，2004年3月）

果敢にも，いや無謀にも，モーツァルトのオーボエ協奏曲（ピアノ伴奏版）に挑戦した。

音楽は優れたコミュニケーションツールに変身できる(そう、どこでも必ず楽器持参!)。音楽はひとの気持ちをほぐし、癒す。こころをこめて演奏する曲には「魂」があると信じるから。

寺田佐代子さんと毎年のように録音した医師と患者のハーモニー、「名刺代わりのCD」はすでに6枚。近々、7枚目の収録を予定。この贅沢な無料CDをいったいどのくらいのひとに配つたのだろうか。患者さんには必ずプレゼントすることにしている。プロのように上手いかわからないことは、本人たちは十二分に承知。三重県志摩市の“合歓の郷”の録音担当の桜井博司氏とはずいぶん親しくなった。リズム感と音感と技術に乏しい単なるオジサンとオバサンの不思議なペアの演奏を、辛抱強く熱心に収録してくれることに深謝。

わかば会のコンサートは毎年継続されている。大学内で行われた6周年記念コンサートに引き続いて2009年5月に京都で開催した無料コンサートは、仲間の輪が広がってゆくことを願って、“「輪の和」コンサート”と命名された。多くの医療者と患者仲間、そして学生や障害者に

も参加してもらおう手づくりコンサート。多くのボランティアにささえられる輪、みんなでつくりあげる音楽の和。その後、地元愛知のみならず、東北の被災地、一関(岩手県)と東松島(宮城県)でも開催した(写真2)。今年は、9/11(水)に横浜で第7回、10/25(金)には愛知県岡崎で第8回「輪の和」コンサートが開催された。来年2014年は、8/9(原爆投下の日)に長崎市での開催を予定している。

さまざまな場所で、いろいろなひととひとが出会う活動の輪を広げていくうちに、音楽は、誰もが平等で対等な関係で楽しめる、感動する、多くのひとと共感できる、周囲のひとを仲間にする力がある…、実に、多くの魅力と吸引力があると、こころから実感している。

「思いを形に」がモットー。失敗しても実践することに意味がある。勇気をもって「行動」することは、もっぱら、寺田佐代子さんから学んでいる。寺田さんとは、こころのセルフケアやピアサポートに関する多くの著作物も出版してきている。ぜひ、わかば会HPを訪問してほしい。そう、新しい一歩への勇気に乾杯。



写真2 被災者支援「輪の和」コンサート in 岩手県(2011年8月、一関市)

医療者(病理医)、がん患者、障害者、学生(岩手医大、秋田大や東京女子医大の学生たち)、奥州市のこどもたち(「雨にも負けず」の朗読を披露)がみんなで作った感動のコンサートとなった。中央のケントミはボランティアで駆けつけてくれた沖繩のデュオ(障害のある“ケン”の三線と、末期乳がん患者の“トミ”による島太鼓)。

◆東南アジアでのボランティア活動

私は毎年、横浜のNPO、地球市民 ACT かながわ (TPAK) に協力する形で、ミャンマー、タイあるいはインドで1週間ほどのボランティア活動を実践している。同行する学生たちとともに、東南アジアの少数民族の子どもたちに対する衛生教育を担当させてもらっている。義務教育すら十分に受けられない彼らの多くは、医療者と接したことがない。TPAKの支援の現場は、医療の存在しない地域なのである。手洗い、うがい、歯磨き、沐浴の大切さを伝え、簡単な栄養指導や日常生活指導もしている。病理医ながら、簡単な身体診察もさせてもらっている(ヒヤヒヤ)。オーボエはリード部分以外の本体を3つに分解できるため、手荷物で簡単に持ち運べる。こうした支援活動に、オーボエ演奏が有用であることを実感している。孤児院に集まる子どもたち(ミャンマー)(写真3)、TPAKと村人で行った学校で勉強する子どもたち(タイ、ミャンマー)、社会的差別を受ける自立心旺盛な

女の子たち(インド)。そして、私のつたない演奏に聴き入る子どもたちの興味津々で真剣な数百の眼。忘れがたい思い出として、脳裏に焼きついている。

そういえば、3月末の暑いインドからの帰りのデリー空港。手荷物チェックカウンターでの話。金属キーが豊富で、かつ調整用のねじ回しの入った楽器を妙に怪しがられた。いろいろ説明したら、女性係官が「吹いてみる!」。というわけで、私は、出国チェックの現場でオーボエを吹かせてもらった、そんな珍しい体験者とあいなった。自然とたくさんの人が集まり、しばしの音楽会(?)。笑顔で無事通過できたことは言うまでもない。

日本でも、ハンセン病施設やホスピスでときどき演奏させていただいている。病院、市民団体やがん患者会などに呼ばれて講演するときは、ほぼ必ずオーボエを持参している。一生懸命演奏することで、場が和む効果はたいへん大きいことをしみじみ実感している。



写真3 ミャンマーの孤児院でのオーボエ演奏会(2006年3月)

ロンジー(スカート風の男性用民族衣装)を身につけての演奏。譜面台がないので、仲間にもせてもらっている。聴衆は200人超。平均年齢は10歳くらい? この初演をきっかけに、ミニコンサート in 東南アジアが癖になってしまった。

◆日本病理医フィルハーモニー(JPP)の結成

実は、私はもう一つユニークな音楽活動を展開している。2006年11月、第52回日本病理学会秋期特別総会(和歌山)で市民公開講座に引き続き形で、患者・市民のための病理医によるミニコンサートを企画・開催した。好評だった。私は寺田さんといっしょに演奏させていただいた。患者さんのために病理医が演奏するチャンスをつくりたい！トランペット吹きの病理医、宮崎龍彦氏(愛媛大病理, 現 岐阜大病理)と相談・画策して、全国に散らばる病理医の演奏家を集結してフルオーケストラをつくらうと提案したのは2009年11月(松山)だった。そして、ついに「日本病理医フィルハーモニー(JPP)」の結成に至った(携帯電話の電源がなくなるほど、全国各地に電話しまくったのが懐かしい)。私が団長を務めるJPPの登録団員・団友は、現在150名を優に超えている。初練習は、2010年4月の第99回日本病理学会総会の期間中に新宿で。会長招宴懇親会会場では、有志による弦楽アンサンブルが演奏された。翌年の第100回記念総会(横浜)での演奏が目標だった。

2011年4月に予定していた(社)日本病理学会

創立100周年祝賀コンサートは、同年3月11日の東日本大震災のため、残念ながら、演奏を自粛せざるを得なかった。そして、2012年4月29日(日)の夕暮れのひととき、果敢にも、横浜みなとみらいホール、大ホール(計1,850席)において、2時間にわたる単独の無料コンサートを開催した。多くの患者・市民を招待した。第101回日本病理学会総会(新宿)の翌日だった。出演者は90名、約半数が病理医。他科の医師や検査技師、そして学生や病理医の家族の手伝いを得てはじめて成立したコンサートだった。多くの個人、企業からの寄付も欠かせなかった。何と、満席の観客の中での、文字通り、感動の演奏会となった。

指揮する病理医は、秋山 隆氏(川崎医大)と岡 輝明氏(関東中央病院)。第一部のフィンランディアとG線上のアリアでは、東日本大震災被災者への励ましの気持ちを込めて演奏した。第二部では、(社)日本病理学会が世界に誇るテノール歌手、米澤 傑氏(鹿児島大)が、オーケストラとともに「誰も寝てはならぬ」「オーソレミオ」などを朗々と歌いあげた(写真4)。パイプオルガンの音色もホールに響きわたった。



写真4 第一回日本病理医フィルハーモニー演奏会
(横浜みなとみらいホール大ホール, 2012年4月)

全くの予想外に、1,850席に満席の聴衆を得た、掛け値なしの「感動」の演奏会となった。米澤 傑氏(病理医, テノール)による熱唱。指揮: 岡 輝明(病理医)。

まさに、病理医が患者・市民に顔をみせる活動そのものとなったといえよう。

30名のボランティア、ロビースタッフ(患者さんと一般市民、病理医は2名のみ)の働きは本当にすばらしかった。寺田佐代子さんはロビーマネージャーとして大活躍だった。満席の観客を時間通りに客席に誘導できたのはまさに奇跡的だった(ホール担当者の言)。掛け値なしに、病理医と患者さん・市民によってなし得た手づくりコンサートと言えた。今でも、みなとみらいホールのロビーストに「伝説のJPP」と言わせているのは本当の話。

2013年6月8日(土)には、第102回日本病理学会総会(札幌)の最終日に、札幌芸文館大ホールで第2回JPP演奏会が開催された。約1,200名の聴衆を得て、再度、練習不足のハンデを超える集中力を発揮した演奏会となった。札幌医大の学生を含む70名のオケメンバーに加えて、札幌アカデミー合唱団、札幌医大コーラスや病理医よりなる約100名のコーラスが、オーケストラとともに素敵なハーモニーを奏でた。米澤傑氏(テノール)のソロの歌声に加えて、瀧山晃弘氏(北海道大)によるモーツァルト(ピアノ協奏曲第23番第二楽章)のピアノソロ演奏もあった。学会長の佐藤昇志教授(札幌医大)による全面支援の賜物でもあった。

2014年4月26日(土)には、広島での学会最終日に、第3回演奏会を予定している。今後も

ぜひ継続してゆきたいユニークな活動である。

JPP活動の目標は3つ。

- 1) 日本病理学会会員が音楽を通して交流し、理解し合い、音を楽しむこと。
- 2) 日本病理学会にはオーケストラという“クラブ活動”があることを示して、若手病理医のリクルートに使うこと。
- 3) 患者・市民に病理医の存在をアピールする有効な手段となること。

◆お願い

NPO法人びあサポートわかば会、JPPともに、熱烈なる応援者を募集中です。よろしかったら、私まで連絡あれ。

堤 寛(Yutaka Tsutsumi)

tsutsumi@fujita-hu.ac.jp

◎藤田保健衛生大学医学部第一病理学ホームページ:

<http://info.fujita-hu.ac.jp/pathology1/>

◎NPO法人びあサポートわかば会ホームページ:

<http://www.npowakabakai.com/>

<http://aichipeer.com/>

◎日本病理医フィルハーモニーホームページ:

<https://www.facebook.com/JapanPathologists>

Philharmonic

<http://info.fujita-hu.ac.jp/pathology1/JPP/>

読者の方にはさまざまな趣味をお持ちの方がおいでかと思えます。
編集室では本コラムへのご投稿を心よりお待ちしております。